# 第三章　夕霧の物語　匂宮と薫

［第一段　夕霧、六条院を訪問］

*大将の君も（さて一条宮は相変わらず悲嘆に暮れていらっしゃったが、大将の源君も）、夢思し出づるに（亡き藤君の夢を思い出しては）、　*「大将の君も」という言い方は、上文の大将邸の場面から、次の幕に変わったということを示しているだけでなく、特に係助詞「も」は列挙であろうと強調であろうと他の何かか誰かに比してという意味を示すので、一条宮が相変わらず悲嘆に暮れている、などの描写が先になければ、素直に読み進めない。脱稿が強く疑われるが、もしや、この「も」だけで、一条宮は相変わらず悲嘆に暮れていらっしゃる、までを読み取れ、ということなのだろうか。気に入らないが、一応その線に乗って置いて遣る。

「この笛のわづらはしくもあるかな（この笛はどうも気になるな）。人の心とどめて思へりしものの（故人は次の持ち主に特に思い入れを持っていたものの）、行くべき方にもあらず（私はその該当者ではないらしい）。

女の*御伝へはかひなきをや（折角の宮からの御伝授だが、笛は男の楽器なので女からの譲り受けは頼りない）。いかが思ひつらむ（故人はこうなることをどう思っていたのか、遺言一つ無いのは実に不可解だ）。　*「御伝へ」の「御」は宮への敬意。御息所から手渡された笛だが、それは故大納言の妻であった宮から大将に託された物、に違いない。注には此処の文意に＜横笛は男性の吹く楽器。『完訳』は「女は笛を吹かないので、女からの伝授はありえない」と注す。＞とある。

*この世にて数に思ひ入れぬことも（生きていれば取るに足らないような些事が）、かの今はのとぢめに一念の恨めしきも（臨終の際に一生の後悔となるのが）、もしはあはれとも思ふにまつはれてこそは（もし情に絆されての事だったなら）、*長き夜の闇にも惑ふわざななれ（それが冥土への道に迷うことになって、あのように夢枕に立つ事になるのだろう）。かかればこそは（だからこそ私は）、*何ごとにも執はとどめじと思ふ世なれ（どういう恋にも執着しないでおこうと現世を考えている）」　*「この世にて」以下の文は難文だが、源君は笛を手にしたことで、ますます六条院姫宮と藤君との不義密通を強く疑い出した、という事情下での内心文として、意味を汲んでみた。此処の係助詞「も」は、一見分かり難いが、言外の対象との比較強調として意味が成立しているようだ。「もしは」は＜或いは別の＞ではなく、上の事柄が＜もしそれが～であったとしたら＞という仮定条件の思考文と読む方が文意が通る。下に「かかればこそは」とある訳だし。　*「長き夜の闇」は注に＜無明長夜の闇に苦しむ、意。「なれ」は伝聞推定の助動詞。＞とある。「伝聞推量」とは、相手の話から事柄の意味を推察する、ということであるなら、夢枕に立った藤君の話から女三の宮との密通およびその若君の藤君胤たることを、源君は改めて強く疑った、ということをこの文は示している、ように見える。左様に補語する。　*「何ごとにも執はとどめじ」という源君の態度を、源氏殿初め世間一般も源君は女に淡白だという認識に繋げているようだ。が、源君も女好きだし、子供も多いし、囲っている女は源氏殿のように多くはなく、五節舞姫だった惟光の娘くらいのようだが、手つき召人もいるようだし、淡白と言うよりは身分秩序を乱す婚姻関係を嫌う、ということだけだったのではないか。が、そういう常識人たる冷静さが、既存概念を打ち払ってでも密着したいという恋の情熱に欠ける、即ち冷淡ないし淡白だといわれるのかも知れない。しかし、他人の価値観だの既成概念だのと言っても、其処から丸で離れた新しさなど、他の誰にも理解されなければ唯の夢想空想に過ぎず、実態として相手の有る人間関系を構築できない。つまり、情熱家が心血を注いでも、実るのはせいぜ

い一寸した工夫を人間関係に味付けする程度のものだ。が、それはそれで意味は有るか。でも、大将は本質的に淡白なのでは無く、作者が源君の家や子供の話題を是まで故意に避けてきた、かの印象が私にはある。

など、思し続けて(などを考え続けて)、*愛宕に誦経せさせたまふ(会葬を上げさせた寺に故人の供養読経を上げさせなさいます)。 *「愛宕」は「おたぎ」と読みがあり、注には＜愛宕は当時の火葬場。「桐壺」巻の桐壺更衣が火葬にふされた場所も同じ。＞とある。桐壺更衣の死去は光君3歳の夏だったので、今から46年前のこと。桐壺巻一章五段には「限りあれば、例の作法にをさめ奉るを、母北の方、同じ煙にものぼりなむと、泣き焦がれ給ひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふ所にいといかめしうその作法したる」とあって、桐壺更衣が「愛宕といふ所に」火葬されたことは確からしいが、「愛宕といふ所」についての具体的な説明はなかった。他資料に拠る当時の都の火葬場といえば、東山の鳥辺野(とりべの)と嵯峨野の化野(あだしの)があったとされるらしいが、「愛宕」は鳥辺野または其処の葬儀寺と多くは考えられているようだ。この物語では他に、夕顔の急死に際して惟光が葬儀を取り計らった時は「道遠くおぼゆ。十七日の月さし出でて、河原のほど、御前駆の火も仄かなるに、鳥辺野の方など見やりたるほどなど、ものむつかしきも、何ともおぼえたまはず、かき乱る心地したまひて、おはし着きぬ」(夕顔巻四章六段)とあり、その更に詳しい描写に「辺りさへすごきに、板屋のかたはらに堂建てて行へる尼の住まひ、いとあはれなり。御燈明の影、ほのかに透きて見ゆ。その屋には、女一人泣く声のみして、外の方に、法師ばら二、三人物語しつつ、わざとの声立てぬ念仏ぞする。寺々の初夜も、みな行ひ果てて、いとしめやかなり。清水の方ぞ、光多く見え、人の気這ひも繁かりける」(同)とあって、鳥部野の火葬場が清水寺の裏山辺りだったように記されていた。何故か夕顔の葬儀では「愛宕」ではなく「鳥辺野」と記されていて、もしや格式有る寺院での正規の法要が執り行われなかったからなのかとも思ったが、手厚い法要が営まれた筈の葵の上の葬送でも「鳥辺野に率て奉るほど、いみじげなること、多かり」(葵巻二章六段)と語られていたので、「おたぎ」と「とりべの」との関連や違いはやはり分からない。因みに、夕顔の急死は32年前の光君17歳の時のことになるが、八月十六日未明、という今と同じ季節柄であり、27年前に源君の実母の葵の上が、その出産後ほど無くして亡くなったのが八月十四日、葬送が二十余日とされていて、これも中秋だ。葵の上の死去は、光君22歳の近衛大将の時の事だったが、今や源君28歳の近衛大将だ。ところで、火葬は遺体をそれ以上腐敗損傷させる醜さを避ける処置で、人物を生前の姿で記憶するための工夫の一つだから、基本的に単一機会の事柄であり、灰となった後は多くの場合は寺の墓所に埋葬されることになる。そのことからすると、「愛宕に誦経せさせたまふ」は＜故大納言の遺灰埋葬寺に安眠供養の念仏を上げさせなさる＞ということなのかと考えもしたが、と言って、「愛宕＝菩提寺」とまでの一般語用は出来そうもない。

また、かの心寄せの寺にもせさせたまひて(また、故人が信奉していた寺にも読経を上げさせ為さって)、

「この笛をば(この笛というものは)、わざと人のさるゆゑ深きものにて(特に故人の愛用の品ということで)、引き出でたまへりしを(宮が私に譲るべく引き出しなさったものなので)、たちまちに仏の道におもむけむも(私が預託される適任者で無いからと言って、このまま寺へ預けるのも)、尊きこととはいひながら(故人の供養に与る善行とはいうものの)、あへなかるべし(こうして私の手許に来た笛自身の、宿命を果たせなさそうだ)」

と思ひて(と考えて)、六条の院に参りたまひぬ(大将は笛を持って六条院に参上なさいました)。

*女御の御方におはしますほどなりけり(源氏殿は里下がりしていらした桐壺女御の御部屋にいらっしゃるということで、大将は中門廊から東の対の前を通って寝殿に行き掛けなさった時な

のでした)。三の宮(女御腹の三番目の親王が)、三つばかりにて(三歳ほどで)、中にうつくしくおはするを(親王方の中でも特に可愛らしくいらっしゃって)、*こなたにぞまた取り分きておはしまさせたまひける(この東の対の紫の上の許に女一の宮の他に格別大事にしていらして頂いている若宮が)、走り出でたまひて(対の部屋から走り出ていらっしゃって)、　*「女御の御方」は桐壺女御の里部屋で、春の町寝殿の東半分を占めている。西半分は女三の宮の部屋。注には＜女御は明石女御、里下がり中。『集成』は「源氏は、常は紫の上方（東の対）にいるので、夕霧はまずそこを訪れる」と注す。＞とある。そうなのかもしれないが、源君が中門廊玄関先で侍に来意を伝えれば、殿が寝殿にいることぐらいは応えそうだ。後は勝手知ったる実家なのだから、大将は東の対は素通りして寝殿に向かった、のかも知れない。が、その東の対を通り掛かったら、あっさり素通りできなかった、ということではないのか。　*「こなたにぞまた取り分きておはしまさせたまひける」は注に＜紫の上が女一宮の他にもまた三の宮を特別に引き取って、の意。＞とある。「こなた」は六条院全体やその寝殿のことではなく、東の対のことらしい。是は私には非常に分かり難い変な拙い書き方に見えるが、そう読む他は無いらしいので、それならいっそ素直にそう読めるように上文をそれに見合うように、冗長を承知で補語する。「また取り分きて」は＜既にあるものに更に別に加えて大事にして＞らしい。「おはします」のは若宮で、「させたまふ」のも若宮、なのだろう。紫の上ないし源氏殿が主語なら＜奉り給ふ＞とか言いそうだ。何れ、面倒で分かり難い。「ける」は状態の助動詞「けり」の連体形。

「*大将こそ(大将よ)、宮抱きたてまつりて(私を抱き申し上げて)、*あなたへ率ておはせ(あちらの部屋へお連れ申せ)」　*「大将こそ」の限定強調の係助詞「こそ」は＜呼び掛け＞の語用、と注にある。意味として、そうなることは分かるし、今でも是に似た「こそ」の語用はあると思うが、文型から見れば、此処でも文末は「おはす」の已然形「おはせ」で結ばれていて、係り結び文法に違いない。本当に全くの事の序でだが、已然形という活用語法が示す意味を此処で少し考えてみる。「已然(いぜん)」とは＜既に有る形＞という言い方だが、実際の現在の形態や状態を示すのは連用・終止・連体という活用であって、「已然」は「未然」に対する分類命名で、恐らくは重要な前提が省略された表示説明法だ。即ち、「已然」とはいうものの、それは実際に＜既に有る形＞を示すのではなく、未来想定上の仮定条件として＜既に有る形として考えて策を練る＞という思考を示している。ということは、見方を変えれば、物事の特徴や状態を示す形容詞や動詞に「已然形」と言われるような語尾変化をつけてみると、多くの人がその物事についての未来予測の概念を共有出来た、ということなのかも知れない。対して「未然」は現在推定上の仮定条件として＜今の状態を認識して策を練る＞という思考を示す。未然形に打消しの助動詞「ず」が付いた語の言い切りは、本来の未然思考文型に於いて、現状認識部分だけで打開策を省いた便法語用なのではないか。そして、係り結びの已然形も、本来の已然思考文型に於いて、特に強い意思表示となる「こそ(個別に其を指し示す)」という語が聞き手にとって印象深いために、その述辞の已然形を評価する意味で明示されたであろう文型本来の主旨の＜私はそれを望む＞という話者の意志を、当然に聞き手が適えるべく受け止める、という認識が社会秩序上の人間関係に於いてほぼ自動的に慣習化して、その明示が省かれた命令文として実効した、と言えないだろうか。　*「あなた」は＜母明石女御のいる寝殿。＞と注にある。「こなた」が東の対から「走り出でたまひて」おはす南縁である事を示す言い方、なのだろう。そして、宮は「あなた」に大将が向かっている事を知っているし、「あなた」に行くと楽しそうだから自分も行きたいと思った、のだろう。また当然、宮には乳母や女房が付き従って出て来ている筈で、彼らから大将伯父さんが来たことを御簾内で知らされたからこそ、宮は出て来た、に違いない。

と、みづからかしこまりて(と自分に敬語使いをして)、いとしどけなげにのたまへば(とても舌足らずに拙く仰るので)、うち笑ひて(大将は笑って)、

「おはしませ(さぁこちらへお出でなさいませ)。いかでか*御簾の前をば渡りはべらむ(でも私は、御祖母上の御部屋の前を御挨拶も無しには通れません)。いと*軽々ならむ(大変失礼ですので)」　*「御簾の前」は注に＜紫の上のいる御簾の前。＞とある。「いかでか渡りはべらむ」は＜私は通れない＞だが、形式上の言い方で実意の無い子供相手の冗句だ。が、それを子供は真に受ける。　*「軽々」は「きゃうきゃう」と読みがあり、ナリ活用の形容動詞とあるので、「軽々なり」で＜軽々しいことだ＝無作法だ＞。「軽々ならむ」は未然形「なら」に推移予測の助動詞「む」が付いた語用で＜無作法になってしまう＞。

とて、抱きたてまつりてゐたまへれば(と言って若宮を御抱き申して東の対の縁側にお座りなさると)、

「人も見ず(誰も見ていないぞ)。まろ、*顔は隠さむ(私がそなたの顔は隠してあげよう)。なほなほ(さぁ早く進め)」　*「顔は隠さむ」は注に＜匂宮の詞。『集成』は「わたしが顔を隠してあげよう。顔を隠せば、人に見えないと思っている。幼い精一杯の知恵」。『完訳』は「夕霧の顔を。一説には宮自身の顔を。幼児らしい知恵」と注す。＞とある。若宮が隠すのは大将の顔だ。大将が「御簾の前を」自分は素通りできないと言っているのだから。

とて、御袖してさし隠したまへば(と言って宮が御袖を差し伸べて大将の顔を御簾側から隠しなさるので)、いとうつくしうて(とても可愛らしく)、率てたてまつりたまふ(大将は宮を女御の御部屋までお連れ申し上げなさいます)。

[第二段　源氏の孫君たち、夕霧を奪い合う]

こなたにも(女御の御部屋でも)、*二の宮の(兄宮である二番目の親王が)、*若君とひとつに混じりて遊びたまふ(入道宮がお産みになった若君と一緒に遊んでいらっしゃるのを)、*うつくしみておはしますなりけり(殿は見守っていらっしゃるのでした)。　*「二の宮」は注に＜後の式部卿宮。音楽の才能が期待された（若菜下）。＞とある。参照指摘された若菜下巻の記事は、五章二段で源氏殿が七弦古琴を論じた際に、「この御子たちの御中に、思ふやうに生ひ出でたまふものしたまはば、その世になむ、そもさまでながらへとまるやうあらば、いくばくならぬ手の限りも、とどめたてまつるべき。二の宮、今よりけしきありて見えたまふを」と、自分の技法を引き継ぐ素質が「二の宮」にありそうだと期待を滲ませた場面を指しているのだろう。ところで、殿が古琴を論じたのは朱雀院五十賀のための試楽に先立つ内々の音合わせであったらしい女楽の時だったが、それは二年前の「正月二十日ばかり」(若菜下巻四章一段)のことだった。その女楽には身重の桐壺女御も箏で参加していたが、女御はそれに先立つ年末十二月初めから六条院に里帰りしていたようで、その時のことは「御子二所おはするを、またもけしきばみたまひて、五月ばかりにぞなりたまへれば、神事などにことづけておはしますなりけり」(同三章五段)と語られていた。十二月で妊娠五ヶ月だったのなら、翌年の五月くらいが出産だ。が、そういう話題は語られず、女楽直後に紫の上が体調を崩し、二月に予定されていた朱雀院の御賀が十二月に延期され、その試楽の為に女御が子連れで里帰りした時の事が「女御の君も里におはします。このたびの御子は、また男にてなむおはしましける。すぎすぎいとをかしげにておはするを、明け暮れもて遊びたてまつりたまふになむ、過ぐる齢のしるし、うれしく思されける」(同十一章五段)とあっただけだ。二年前は波乱の年で、その三月には紫の上が二条院に転地療養し、源氏殿も看病で二条院に移り住み、女御も見舞いに訪れたが、むしろ身重に障るからと直ぐ御所に帰参させられたようだ。そして四月には紫の上の絶命と蘇生、および姫宮と衛門督との密通があった。五月には紫の上の回復の兆しと六月の安定状態が語られていたが、女御のお産は何故か語られていない。これらの間にも源氏殿

は何度か六条院に帰っているが、全て姫宮の様子を見舞う話だった。女御のお産は何処でしたのか。御所は血の穢れを嫌うので、お産は里帰りして行う筈だ。実に不可解だが、如何ともし難い。それはそれとしても問題は、「このたびの御子は、また男にてなむおはしましける」とあった、その「このたびの御子」が三の宮なのか、それとも、その前に「御子二所おはする(みこふたところおはする)」とあったのが二の宮と三の宮なのか、ということだ。この「御子二所おはする」の注に＜明石女御、妊娠五月になる。『集成』は「すでに女御の手許を離れている東宮と女一の宮は除いた、二の宮と三の宮であろう。前に「御子たちあまた数添ひたまひて」（若菜下）とあった」。『完訳』は「一皇子一皇女がいる」と注す。＞とあり、その時点では女御腹の御子たちに付いての話題が余りに少なく、私には彼らの人物特定が出来なかったが、此処での再登場で、この際およその把握はして置きたい。で、「御子二所おはする」は三年前の暮れの記事だが、その少し前に「春宮の御さしつぎの女一の宮を(皇太子のすぐ下の女一の宮を)、こなたに取り分きてかしづきたてまつりたまふ(紫上は東の対に引き取って大切に御養育なさいます)。その御扱ひになむ(その御世話焼きで)、つれづれなる御夜がれのほども慰めたまひける(遣る瀬無い殿の夜離れのほども慰めなさいます)。いづれも分かず(紫上は桐壺女御の御子たちを、分け隔て無く)、うつくしくかなしと思ひきこえたまへり(いとしくかわいいと思い申しなさいました)」(若菜下巻三章一段)と、その年の三月あたりの御世代わりで、新帝の妹宮である女三の宮の立場が強くなり、紫の上は劣勢を孫娘の養育で紛らわせていたという記事があった。さらに、「二の宮、今よりけしきありて見えたまふを」と一月の女楽で殿が言っていることからして、「このたびの御子」以前に二皇子一皇女が確認できるが、にも関わらず「御子二所おはする」というのは、『集成』が注する＜すでに女御の手許を離れている東宮と女一の宮は除いた、二の宮と三の宮であろう。＞という解釈に説得力を持たせる。だとすると、「このたびの御子」は二年前の五月生まれの男四の宮ということになり、今が仲秋葉月八月とすると、数え 3 歳は変わり無いが、満年齢で 2 歳と三ヶ月ほどだ。となると、三の宮は 4 歳、二の宮は 6 歳、くらいだろうか。あと、女一の宮が 8 歳で東宮一の宮は 10 歳くらいというのは整合するのか。桐壺女御はこの年で 21 歳。東宮を生んだのが八年前の 13 歳の三月十日過ぎのことなので、東宮は 9 歳。女一の宮が年子だとすれば辻褄は合う。が、4,5 歳の三の宮と 6,7 歳の二の宮が此処の描写に符合するのか。また、四の宮が 3 歳なら、此処に登場しない訳は無いだろうが、どうなのだろう。さすがに東宮だけは別格で「御子二所おはする」は二の宮と女一の宮のことで、「このたびの御子」が三の宮なのか。「すぎすぎいとをかしげにておはするを、明け暮れもて遊びたてまつりたまふになむ、過ぐる齢のしるし、うれしく思されける」の主語は紫の上だが、だとすれば、「こなたにぞまた取り分きておはしまさせたまひける」に符合するようにも見える。いや、しかしやはり「御子二所おはする」は「皇子二所おはする」で二の宮と三の宮のことなのか。結局、断定できない。この作者は、なのか、この時代は、なのか、つくづく不親切な書き方の話運びで、此処まで見直しても分からないのでは閉口する。　*「若君」は女三の宮が産んだ御子。昨年の一月生まれなので数え 2 歳だが、満年齢でも 1 歳 8 ヶ月ほどにはなる。　*「うつくしみておはしますなりけり」は注に＜主語は源氏。＞とある。従うが、一見では主語が二の宮にも見えるし、女御または女御と殿とも考えられる。それでも此処は一応、「女御の御方におはしますほどなりけり」(一段)を受けた文と取って置く。

隅の間のほどに下ろしたてまつりたまふを(妻戸の入り口際の廂の間に大将が三の宮を下ろして差し上げ為さるのを)、二の宮見つけたまひて(二の宮が見つけなさって)、

「まろも大将に抱かれむ(私も大将に抱かれたい)」

とのたまふを(と仰るのを)、三の宮、

「あが大将をや(私の大将なんだからね)」

とて、*控へたまへり（と言って大将を引き止めなさいます）。　*「控ふ（ひかふ）」は他動詞だと＜引き留める。止める。＞と古語辞典にある。

院も御覧じて（殿もその光景を御覧になって）、

「いと乱りがはしき御ありさまどもかな（とてもお行儀が悪いですね）。公の御近き衛りを（帝の御側近い護衛官を）、私の随身に領ぜむと争ひたまふよ（自分の付き人にしようと争いなるとは）。三の宮こそ（三の宮が）、いとさがなくおはすれ（聞き分けが無くいらっしゃる）。常に兄に競ひ申したまふ（いつも兄に張り合いなさって）」

と、諫めきこえ扱ひたまふ（とたしなめて仲裁なさいます）。

大将も笑ひて、

「二の宮は、こよなく（二の宮はずいぶん）兄心に（このかみごころに、お兄様らしく）ところさりきこえたまふ（弟宮に立場をお譲り申しなさる）御心深くなむおはしますめる（思い遣りが深くていらっしゃるようだ）。*御年のほどよりは（御歳の割には）、恐ろしきまで見えさせたまふ（驚くほど立派に御見えになります）」　*「おんとしのほど」は注に＜二の宮は四、五歳。＞とある。この年齢が後述で明示されているとしたら、三の宮は三歳ほどとなり、二年と少し前に生まれた「このたびの御子」（若菜下巻十一章五段）がその人物ということになりそうだ。だとしたら、注釈の混乱ぶりは何なのか。

など聞こえたまふ（など申しなさいます）。

うち笑みて（殿も笑って）、いづれもいとうつくしと*思ひきこえさせたまへり（どの子もとても可愛いと思い申しあそばされました）。　*「思ひきこえさせたまへり」は注に＜主語は源氏。「させたまへり」最高敬語。＞とある。いつも殿に対して上位敬語を使うわけではないようなので、此処では大将に対しての上位を示すための言い方、だろうか。言葉は場に即して表現されるのが正しいとしても、それは基本的に相対の会話に於いてであって、客観的な事情説明に於いては、引いた視点での一定した表現が現代語では求められる。此処の語りにあるような主語省略の臨場感は捨て難いが、現代語に於いては、それは別途工夫されるべきものとされる。例えば、一定の場を示す枠を明示した上で、その限りに於いては主語省略で描写する、とか。

「見苦しく軽々しき*公卿の御座なり（此処では見苦しく失礼な大納言殿を迎える場となるようだ）。あなたにこそ（あちらで話そう）」　*「公卿（くぎゃう）」は「上達部（かんだちめ）」と同じ、と古語辞典にある。ざっと、政府高官＝上層貴族を言うようだが、私の受ける語感では「公卿」は政府重役、その下に「上達部」の政府高官、さらに「殿上人」の高級官僚、と続く印象だ。「御座」は「おまし」ではなく「みざ」と読みがある。また、「公卿の御座」が＜儀式や集会の際に設けられる公卿の地位相応の座所。また、寝殿造りで貴人用に設けてある部屋。＞という一般語用になっていて、此処ではそれに掛けた洒落語用ということらしい。

とて、渡りたまはむとするに（と言って殿は大将に東の対へ向かおうと仰るがが）、宮たちまつはれて、さらに離れたまはず（宮たちは大将にまとわりついて一行に離れなさいません）。

宮の若君は(入道宮腹の若君は)、宮たちの*御列にはあるまじきぞかしと(女御腹の帝の親王たちと御同列ではいけないと)、御心のうちに思せど(殿は御内心ではお思いになるが)、なかなかその御心ばへを(却ってその殿のご配慮を)、母宮の、御心の鬼にや思ひ寄せたまふらむと(入道母宮が子贔屓の親心で反感なさるかと)、これも心の癖に(つい身内の甘さで)、いとほしう思さるれば(厳しく律するのが可哀想に思えて)、いとらうたきものに思ひかしづききこえたまふ(若君をとても可愛くお思いになって大事に御世話申しなさいます)。　*「御列」は「おんつら」と読みがある。此処の文意について、注には＜源氏の心中。「宮の若君」は女三の宮の若君、すなわち薫。『集成』は「臣下の分際だから、公私の別をつけるべきだと、内心は考える」と注す。＞とある。

［第三段　夕霧、薫をしみじみと見る］

大将は、この君を「まだえよくも見ぬかな」と思して(大将はこの入道宮腹の若君の顔を「まだ良くは見ていなかったな」とお思いになって)、御簾の隙より(みすのひまより、母屋の御簾と御簾の間から)さし出でたまへるに(顔を差し出しなさった若君に)、*花の枝の枯れて落ちたるを取りて、見せたてまつりて、招きたまへば、走りおはしたり(桜の枝の枯れ落ちたのを取ってお見せ申し上げて招きなさると、若君は走っていらっしゃいました)。　*「花の枝の枯れて落ちたる」は故衛門督を象徴させた言い方だろうか。だとしたら、「花」は蹴鞠の桜か家門の藤あたりだろうが、「枝の枯れて落ちたる」となると、秋の長雨に朽ち落ちた＜桜＞が本命か。

*二藍の*直衣の限りを着て(若君は赤紫色の袍の見事な出来のものを着て)、いみじう白う光りうつくしきこと(非常に色白でつやつやと光る美しさは)、皇子たちよりもこまかにをかしげにて(親王たちよりも小さくて可愛らしく)、つぶつぶときよらなり(丸々として端正です)。　*「ふたあゐ」はタデ草の藍色(青)にベニバナの紅(赤、くれない＝呉藍)を重ね染めした紫色、とのこと。二歳の子供らしい色となると、明るい感じの薄い色合いかとも思うが、男の子なのでピンクよりは青みが強いものを考えて見ると、どうも余り高貴さが無い。むしろ赤味を強くして青でくすませた濃い藤色辺りか、などと思ってみるが、どうも良く分からない。ところで今では藍色は青を指すが、「あを」という言葉は元々は今のように特定の色合いを示す言葉ではなかったのかも知れない。今でも、身の回りには相当な色数の品々があるが、日常語として使う色名は然程多くは無い気がする。色に限らず、言語は一定の複数人員で構成された集団内に於いて共通認識された印象を示す音識記号であってみれば、同じ場にいる人びとにとって個体識別に必要な分類は比較印象で事足りた、ようには想像できる。例えば、暗い→黒、明るい→白、明瞭だ→赤、などは現代語にも引き継がれている印象だ。では、「青」はどういう印象か。ま、当て図法だが、明瞭でない＝が、色合いはある＝何か色付いている、あたりはどうだろう。是だと、色付く＝染める、と拗じ付けられる。「あを」に「青」の漢字を当てたのも、この理屈だと破綻しない。かも知れない。　*「直衣(なほし)」は平服・平常服とあるが、形は公式正規の上着の袍(はう)と同じで、雲上世界の公卿家ならではの装束だろうが、それにしても二歳の子の服としては想像し難い。で、「風俗博物館」サイトの「日本服飾史 資料」編の「半尻をつけた公家童子」ページを参照してみるが、それでも二歳の子の姿には遠い気がする。ともあれ、「二藍の直衣」とあるのだから紫地の綾織紋様の上着を着ていたのだろう。また「限り」については、訳文は＜そのものだけ＞という数量限定の意味に取っているようだが、私は＜極上品＞と取って置く。

*なま目とまる心も添ひて見ればにや(いくらかこの子が故藤君と姫宮との不義の子ではないかという疑いを持って見る所為か)、*眼居など(目つきなどは)、これは今すこし強うかどあるさままさりたれど(この若君の方は故君よりは今少し強く才気立った様子だが)、*眼尻のとぢめを

かしう*かをれるけしきなど(目尻の端が美しくまつ毛が潤んでいるところは)、いとよく*おぼえたまへり(故君にとてもよく似ていらっしゃいました)。　*「なまめ」の「なま」は、古語辞典では＜なんとなく・どことなく・いくらか＞と説明されていて根拠の曖昧さを示しているようだ。大将は蹴鞠の日の猫が御簾を引き上げて姫宮の姿が仄見えた時以来、衛門督の姫宮への興味の強さを懸念していたので、当然、この若君が衛門督の胤ではないかという疑義。　*「眼居(まなこゐ)」は＜目つき、まなざし＞と古語辞典にある。目元や目頭や目尻といった形態ではなく、気持や性格を示す形容らしい。　*「眼尻」は「まじり」と読みがある。　*「かをる」は「薫る」で＜美しさがこぼれるようである＞と古語辞典にある。まつ毛に憂いあった、と思って置く。　*「おぼゆ」は＜思い出される→似ている＞。

口つきの、ことさらにはなやかなるさまして、うち笑みたるなど(口元が特にはなやいだ表情で笑うところなどは)、「わが目のうちつけなるにやあらむ(自分がそう思って見る所為で受ける印象ではないだろう)、大殿はかならず思し寄すらむ(殿は若君が故衛門督に似ていることにきっとお気付きだろう)」と、いよいよ御けしきゆかし(と大将はますます殿の御考えを知りたくなります)。

宮たちは(桐壺女御腹の親王たちは)、思ひなしこそ気高けれ(王家と思って見る所為か気高く感じられるけれど)、世の常のうつくしき稚児どもと見えたまふに(普通の可愛らしい子供に見えなさるが)、この君は(この入道宮腹の若君は)、いとあてなるもの*から(親王たちに劣らず、とても気品がある上に)、さま異にをかしげなるを(格別に印象深い美しさなのを)、*見比べたてまつりつつ(見比べ申し上げながら)、　*「から」は基点を示す格助詞の副詞語用で、此処では「気高けれ」が示す基点の「気高さ」と「うつくしさ」項目について「△から▲なるを」が＜△である上に▲であるのを＞という言い方になる半ば定型化した比較構文、に見える。　*「見比べたてまつりつつ」は興味深い。女御腹の親王たちは、家筋としては今上帝の皇子であり、まさに正統王家であって、六条院の中でこそ大将は伯父さん顔をしていられるが、御所では皇子たちが主家であり、大将は臣下に過ぎない、という高貴さだ。また、血筋からみても、朱雀院の御子である今上帝と准太上天皇六条院殿の御子である桐壺女御との間に出来た正統性の強さだ。が、実質では受領家格の明石御方の血を桐壺女御は引いており、藤原大臣家格の血を引く大将から見て、幾分かの気安さがあるのかも知れない。一方の入道宮腹の若君は、家筋こそ六条院源氏殿の御子であり、朱雀院の御子である入道宮との間の子という高貴さは、有力臣下の藤原氏一族の公卿身分とは一線を画す正統性があって、その意味では兄に当たる大将は幾分と気後れを覚えるところかも知れない。が、実質は源氏殿の御子ではなく、故衛門督藤原君の子であるとするなら、同じ臣籍降嫁とは言え、王家生まれの源氏殿とは違って、生粋の臣下筋である藤原家に下った姫宮の孕んだ子ということになって、その正統性は大将より劣ることになる。そういう疑義を持ちながらも、大将は、入道宮腹の若君の方が女御腹の親王たちよりも「さま異にをかしげなる」と見ている、ということはとても複雑な心理状態にあるように思える。

「いで、あはれ(いやぁこれはどうなのだろう)。もし疑ふゆゑもまことならば(もし疑いが本当のことだったなら)、*父大臣の(ちちおとどの、故衛門督の父の藤原大臣が)、さばかり世にいみじく*思ひほれたまて(あのように故君の短命に放心なさって)、　*「父大臣」は＜故衛門督の父の藤原大臣＞という言い方だろうと思うが、大将から見ても藤原殿は義父ではある。　*「思ひほる」は「思ひ惚る」で＜放心する＞。なので、「世」は＜故君の短命＞。

『子と名のり出でくる*人だになきこと(衛門督は早世した上に、子供と名乗り出て来る者さえいないとは)。形見に見るばかりの*名残をだにとどめよかし(形見として見守れるような遺児だけでも残して呉れれば良かったのに)』　*「人だになきこと」の「だに」は比較上位に対して比較下位を示す助詞で、その比較下位を「なし」と打消すことで比較上位の重さを強調する言い方、のようだ。此処での比較上位は衛門督の早世。　*「名残をだにとどめよかし」の「だに」は反実仮想構文に於いて最小限の願望を示す助詞語用で、此処での「名残」は＜衛門督の遺児＞。「とどめよかし」の「とどめ」は仮定思考文なので「止どむ(残す)」の已然形。「よかし」の「よ」は「良し」の語幹、仮定文中の「か」は＜そういう結論も一定の妥当性があるだろう＞という試案、「し」は「か」の妥当性の強調で、「よかし」は＜(そういうことだったら)良かったのに＞という言い方、なのだろう。

と、泣き焦がれたまふに(と泣き焦がれていらっしゃるのに)、聞かせたてまつらざらむ*罪得がましさ(この若君が衛門督の遺児だと藤原殿に、お知らせ申し上げない罪を負いそうだ)」など思ふも(などと思うものの)、　*「罪得がましさ」は「もし疑ふゆゑもまことならば」としても「聞かせたてまつらざらむ」という藤原殿への背信だが、逆に「聞かせたてまつる」としたら実父源氏殿への背信になるだろうし、そも「もし疑ふゆゑもまことならば」としたら、その露顕は不義自体の不始末が姫宮や故衛門督の不名誉に留まらず、源氏殿や朱雀院や延いては帝にまで好ましくない波風となる畏れ多さだ。

「いで、いかでさはあるべきことぞ(いや、どうしてそんな畏れ多い事があってよいものか)」と、なほ心得ず(と大将はやはり不義密通が信じられず)、思ひ寄る方なし(今はこの若君を見ての印象以上の確証もありません)。

心ばへさへなつかしうあはれにて(若君は気立てまで素直で親しみがあり)、睦れ遊びたまへば(近く寄って来て遊びなさるので)、いとらうたくおぼゆ(大将はとても可愛く思えます)。

[第四段　夕霧、源氏と対話す]

対へ渡りたまひぬれば(殿と大将は東の対に移りなさってからは)、のどやかに御物語など聞こえておはするほどに(穏やかにお話し合いをなさっている内に)、日暮れかかりぬ(日暮れ掛かって来ました)。昨夜(よべ、大将が昨晩)、かの一条の宮に参うでたりしに(かの一条宮邸に参上した際に)、おはせしありさまなど聞こえ出でたまへるを(宮が合奏なさっていらした様子などをお話し出しなさったのを)、ほほ笑みて聞きおはす(殿は微笑んで聞いていらっしゃいます)。

あはれなる昔のこと(殿は衛門督が懐かしく思い出される昔のことに)、かかりたる節々は(関した話には)、あへしらひなどしたまふに(肯いたりなさって)、

「かの*想夫恋の心ばへは(その未亡人がお弾きになったという想夫恋という曲の趣は)、げに(確かに夫を喪った女一の宮であってみれば)、*いにしへの例にも引き出でつべかりけるをりながら(如何にも相応しい見本にも引き出されそうな昨晩の演奏ではありながら)、女は、なほ(女というものはやはり)、人の*心移るばかりの*ゆゑよしをも(男が恋心をそそられるような意味を持つ曲などを)、*おぼろけにては漏らすまじうこそありけれと(軽々しく披瀝するべきではないと)、思ひ知らるることどもこそ多かれ(考えさせられることも多いものだ)。　*「想夫恋(さうふれん)」は昨晩の宮邸で、大将が琵琶で宮の箏に相弾きを誘い掛けた曲だ。「心ばへ」に「御」が無いので、これは未亡人の＜御心向き＞ではなく、曲自体の＜主旨、趣き＞なのだろう。で、その「想夫恋」の主旨が＜夫を想う妻の曲＞だ

という認識を基にして、大将は宮を気遣った、ということらしいが、宮はその見透かしを嫌って相伴を躊躇った。が、全く弾かないという余りな無愛想も気が引けたらしく、「ただ末つ方をいささか弾きたまふ」(二章三段)と語られていた。 *「去にし方のためし」は＜古典＝如何にもその内容を示すに相応しい見本＞という一般語用なのだろう。が、この「去にし方のためし」を文字通り＜昔の実例＞と取ってみると、奇妙な見方に符合してしまう。その奇妙な見方とは、この帖または此処のくだりが鎌倉時代後期もしくは室町時代以降に書かれたという仮説、の思い付きだ。さて、その思い付きの辿り。先ず、この「さうふれん」という曲については、大辞泉に＜雅楽。唐楽。平調(ひょうじょう)で新楽の中曲。舞は古くに絶えた。古代中国の晋の大臣王倹が官邸の池に蓮(はす)を植えて愛したことを叙した曲という。日本では男を恋する女心の曲とされ、小督局(こごうのつぼね)が天皇の愛をしのんで弾箏(だんそう)した話は有名。＞とある。で、小督局を更に少し Web 検索すると、是は鎌倉時代の 1250 年頃に成立したとされる「平家物語」の中の話らしい。小督局は高倉天皇の愛人で 1170～80 年代の話らしく、この源氏物語が平安中期の 1010 年頃の成立だとすると、その成立後 150 年以上経ってからの出来事ということになる。高倉天皇の中宮徳子(とくし)の父である平清盛の迫害を恐れた小督局は御所から逃げ出して身を隠した。高倉天皇は小督局恋しさに名手とされる局の箏の音を手掛かりに側近に居所を探させる、という話のようで、平家物語六巻の小督の段には「亀山のあたり近く、松の一むらあるかたに、かすかに琴ぞ聞こえける。峰の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、おぼつかなくは思へども、駒を速めて行くほどに、片折戸したる内に、琴をぞ弾きすまされたる。控へてこれを聞きければ、少しもまがふべきもなき小督殿の爪音なり。楽は何ぞと聞きければ、夫を想うて恋ふと読む想夫恋といふ楽なり」とある、とのこと。で、この話を受けての事かどうかは分からないが、「平家物語」よりは後の 1300 年代の成立とされる吉田兼好の「徒然草」の 214 段に「想夫恋（そうふれん）といふ楽は、女、男を恋ふる故の名にはあらず、本は相府蓮、文字の通へるなり。晋の王倹、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せし時の楽なり。これより、大臣を蓮府（れんぷ）といふ」とある、とのこと。で、此処の「いにしへの例にも引き出でつべかりけるをりながら(古例に引かれそうな場面だが)」を 1300 年代以降に書かれた文と見ても、「想夫恋」に対する認識は破綻しない。が、此処は素直に 1010 年以前の通念認識でも「さうふれん」は「相府蓮」ではなく「想夫恋」だった、と取って置く。 *「心移る」は＜気が変わる＞だが、狭義には＜その気になる→気が引かれる→恋心を持つ＞という言い方らしい。「人」は「想夫恋」本来の意味からすると＜夫＞だが、此処では一般的に＜男＞を意味するようだ。 *「ゆゑよし」は＜由来＞と古語辞典にある。此処では「想夫恋」という曲が「人の心移るばかり」のものだという＜由緒認識があるもの＞という言い方なのだろう。ただ、「ゆゑ(故)」が曲の＜言われ・由緒＝通念＞で、「よし(由)」は事態の＜理由・手段＝事情・状況＞で、「ゆゑよし」で＜そう見做される曲とそう見做される場面＞という語感が、「をも」の強調に込められているような気もする。*「おぼろけ」は＜普通のさま＞と古語辞典にある。が、何度も言うが、分かり難い語だ。ただ、此処では「おぼろけにては」で＜何気無しには＝不注意には＝ウカツには＝軽々しくは＞くらいの語感。

過ぎにし方の心ざしを忘れず(故人の遺志を忘れず)、かく長き用意を(そのように末永く未亡人を援助する用意が其許にある事を)、人に知られぬとならば(先方にも承知置かれたとなれば)、同じうは(同じ世話を焼くなら)、心きよくて(色恋抜きで)、とかくかかづらひ(何かと面倒を見て)、*ゆかしげなき乱れなからむや(品位を欠く乱れた関係にならない事が)、誰がためも心にくく(誰のためにも配慮があって)、めやすかるべきことならむとなむ思ふ(穏便なことなのだろうというように思う)」 *「ゆかしげなき乱れなからむ」は注に＜『完訳』は「おもしろみのない間違い。女三の宮の姉宮に、夕霧までが関わり父院に迷惑の及ぶのを恐れる」と注す。＞とある。「ゆかしげなき」は＜ゆかしさの無い＞。「ゆかし」は＜心引かれる＞という形容詞だが、それは＜気品・情趣などがあるもの＞に対してであり、「ゆかしさ」は＜気品＞を示す。

とのたまへば(と仰ると)、「さかし(確かにその通りだ)。人の上の御教へばかりは心強げにて(しかし、他人への御説教だけはしっかりしているが)、*かかる好きはいでや(この衛門督と姫宮との好事の疑義についてはそういう立派な態度を貫けるのだろうか)」と、見たてまつりたまふ(と大将は父殿を拝見申しなさいます)。　*「かかる好き」について、渋谷訳文は＜このような好色の道＞とあり、「いでや」は源氏殿自身の素行についての大将の疑義、と取っているようだ。確かに、読者としては源氏殿の御説教に説得力は無いと思うし、秋好中宮にまで手を出しかけたことを思えば、こんな説教がよく言えたもんだと呆れもするが、この「かかる」は源氏殿の発言を受けた指示詞だろうか。与謝野訳文では、この「かかる」を＜この場合に処して＞としてあり、その「この場合」とは＜衛門督と姫宮との不義およびその子宝としての若君＞という大将の疑義が真実だった場合、を示す。この日の大将の来訪の主旨は後者なので、私は与謝野文に従う。つまり、「いでや」は今の事情の殿が「心強げにて」いられようか、という疑義だ。

「何の乱れかはべらむ(色絡みではございません)。*なほ、*常ならぬ世のあはれをかけそめはべりにしあたりに(やはり、無常の現世に対する慰めを施し始めた不幸のあった宮邸に)、*心短くはべらむこそ(当座だけの労りで済ませることこそ)、なかなか*世の常の嫌疑あり顔にはべらめとてこそ(良く有り勝ちな未亡人に言い寄って振られたとの嫌疑を世間に持たれるかと、却って懸念されます)。　*「なほ」は＜衛門督亡き後今もなお＞という意味かと思ったが、全体の文意を見ると、是は「なほ△なかなか▲」で＜やはり△だから▲では不都合だ＞という説得調の意見表明の言い方の半ば定型化した言い回し構文のように見える。　*「常ならぬ世」は＜無常の現世＞と古語辞典にある。　*「心短くはべらむ」は＜当座のいたわり。＞と注にある。　*「世の常の嫌疑あり顔にはべらめ」は注に＜『集成』は「未亡人に言い寄ってみたが、はねつけられたので、手を引いたのだとおもわれはしないか、の意」と注す。＞とある。従う。それと、「嫌疑(けんぎ)」は男言葉だろうか、妙に新語の響きがある。なお、「はべらめ」の已然形は「心短くはべらむこそ」の「こそ」を受けていて、本来は文末の結び語である「なかなか」が倒置されている。また、「なかなか」は後ろに＜心苦しけれ＞などが省略されていて、通常なら「嫌疑あり顔にはべらめとてこそなかなか心苦しけれ」くらいの文意を、「嫌疑あり顔」の憎憎しさを強調する為の「とてこそ」で言い切る工夫として、前に倒置された、のだろう。

想夫恋は、心と*さし過ぎてこと出でたまはむや(想夫恋は宮が進んで弾き始めなさったのなら)、憎きことにはべらまし(軽々しい態度との非難に当たるかも知れませんが)、もののついでにほのかなりしは(ことのついでに少しお弾きになったのは)、*をりからのよしづきて(曲調と折り合いが符合して)、をかしうなむはべりし(好い情緒でございました)。　*「差し過ぐ」は＜度を越す。出過ぎる。＞と大辞泉にある。「心と差し過ぐ」は＜気持として出過ぎる→自分の意志を通して→自ら進んで＞となるらしい。また、「差し過ぐ」ことが「憎し」に掛かる言い方なので、この「憎し」が＜出過ぎて軽々しいという非難＞を言い表しているのだろう。　*「をりからのよしづきて」は、源氏殿の「ゆゑよし」を受けていて含みの多い言い回しのように見えるが、言い換えとしては「をかしうなむはべりし」までの全体で源氏殿への皮肉っぽい言い方にするのが精々で、含みは原文で汲む外はない。

何ごとも、人により、ことに従ふわざにこそはべるべかめれ(何事も誰がどういう時にするかで意味が違ってくるものなのでしょう)。*齢なども(宮は年齢なども)、やうやういたう若びたまふべきほどにもものしたまはず(これから色気づきなさるほどの若さでもいらっしゃらず)、また(また私も)、あざれがましう(冗談話で)、好き好きしきけしきなどに(言い寄ろうという態度に)、もの馴れなどもしはべらぬに(物馴れしていませんので)、うちとけたまふにや(宮は親しくなさいません)。　*「よはひなども」は注に＜落葉宮の年齢不詳。女三の宮が二十三、四歳だから、それより上のはず。

＞とある。私は取り敢えず、一条宮を 25 歳と推定して置く。因みに大将源君は 28 歳。昨年二月に死去した衛門督藤君は享年 33 歳。

おほかた*なつかしう*めやすき人の御ありさまになむものしたまひける（全体に穏やかで良識ある様子の御印象の宮でいらっしゃいます）」　*「なつかし」は＜馴つき易い→人当たりが良い→穏やか＞という性質と取る。　*「めやすし」は＜見苦しくない→平均的で良識ある装束・室内飾りつけ＞という外見と取る。ただし、大将はまだ宮の顔は見ていない。

など聞こえたまふに（などと大将はお話し申しなさる内に）、*いとよきついで作り出でて（笛を譲り受けたことなどから、とても上手く話のきっかけを作り出して）、すこし近く参り寄りたまひて（少し殿の御側近くに寄りなさって）、かの夢語りを聞こえたまへば（あの衛門督が夢枕に立って笛を託したいのは他の人だと訴えた話を申しなさると）、とみにものものたまはで（殿は直ぐには何も仰らずに）、聞こしめして（話をお聞きになってから）、思し合はすこともあり（思い当たりなさることもあって、）。　*「いとよきついで作り出でて」は注に＜『集成』は「うまく話のきっかけを作り出して」と訳す。＞とある。「かの夢語りを聞こえたまへば」に繋がるので、例えば＜合奏の話に続いて、笛を譲り受けた話から、衛門督が夢枕に立った話へと続く流れ＞あたりが自然だ。

［第五段　笛を源氏に預ける］

「*その笛は、ここに見るべきゆゑあるものなり（その笛は私が与るべき由来のあるものだ）。*訳文には＜その笛は、わたしが預からねばならない理由がある物だ。＞とある。揚げ足取りをする気は無いが、逐語訳を旨とし、私には必要と思われる現代語文に言い換える際の補語を、言い換えはあくまでも原文の意味を拾うための便宜上の付記として、排して来た、そういう教授の姿勢を一理あるものと評価すればこそ、この分かり易い言い換え文は意外だし、幾分と心外だ。「見る」は多義語だが、基本はやはり＜見る＞のであって、見る－面倒を見る－関与する－与る、とはなっても、預かる＝委託を受ける、という言い方にはならない。結果として同様の事態が生じたとしても、従って別の言い方でも事態の意味が伝わったとしても、どういう言い方をしたのかが問題の場合は、言い方にこそ拘るべきだ。また、「預かる」という漢字表記で「与る」と同様の＜預託管理する＞という意味を示しているとしても、「べし」を＜ねばならない＞という当然必然の助動詞と取るのは読者の思い込みが過ぎる。殿の大将に対する優位性から見て「べし」に強制力があるのは確かだし、殿の本意からしても＜当然必然＞の意図は必ずあるとは思うが、問題は‘言い方として’「べし」に＜必然＞を与えてしまうと、却って殿の権威が廃れるという‘語感’にこそ拘るべきと私には思える。であれば、此処の「べし」は＜～であっても良い＞くらいの妥当性の主張と取るべきで、するとそれは＜与っても良い→与るべき＞と現代語でも「べし」になる。さらに「ゆゑ」だが、「理由」は「ワケ」と読めば＜正統性＞についての由来や経緯を示すので妥当な言い換えに思えるが、是を「りゆう」と読めば理屈や論理が立って、本当の事情に基づく＜正当性＞を隠したい殿の本意を損なう。誤解を避ける為にも、この「ゆゑ」は＜由来＞として置く方が無難だ。

かれは*陽成院の御笛なり（それは陽成院の御笛なのだ）。それを*故式部卿宮の、いみじきものにしたまひけるを（それを故桃園式部卿宮が大事になさっていたが）、かの衛門督は、*童よりいと異なる音を吹き出でしに感じて（かの衛門督が幼少ながら大変に優れた笛の音を吹いていたのに感じ入って）、かの宮の萩の宴せられける日（桃園宮邸で萩の宴が催された日に）、贈り物に取らせたまへるなり（宮が督に贈り物として取らせなさったものなのです）。　*「やうぜいゐん」は＜歴

史上の天皇（868〜949）＞と注にある。陽成天皇は 57 代天皇で 56 代清和天皇の第一皇子とのこと。9 歳で清和天皇から譲位されて帝位に就き、17 歳で退位した(在位 876〜884)とあるので、実権があったようには見えない。が、王家としては伝統を繋いだ正統な人物ということになるらしい。 *「故式部卿宮」は注に＜物語中の朝顔斎院の父桃園式部卿宮。陽成天皇の弟に南院式部卿宮貞保親王（八七〇〜九二四）がいる。柏木は右将軍藤原保忠（九三六年死去）に準えられているので（「柏木」巻）、史実と虚構との不即不離の関係が見られる。＞とある。虚実綯交ぜとは言え、今から見ればほぼ実話で、それも公文書記録とは違って、当時の王家周辺の、それは即ち当然に藤原宗家との関係性も含めて、生々しい生活実態が知れるということが、この物語の価値の相当部分を占めていそうだ。そしてそれは、厳然とした身分社会を警察管理の武力と組織力で支えた上での雲上世界の事柄ではあっても、そういう社会構造に主体的に関わる人々の生活価値観が、この国に於いては宗教教条以前の素朴な自然環境に基づくほど恵まれた気候風土に根ざすものであったと夢見つつ、其処で醸成された王朝文化の穏やかさの中で、色と欲に塗れて暮らす誰にでも分かり易い幸福感が語られるという説得力の普遍性が、私のような現代の一市民にまで伝わるという奇跡だ。 *「わらはより」の「より」は基点または基点からの経過を示す格助詞だろうが、「かの宮の萩の宴」が何時のことか分からないので、是を＜子供の時から＞と言ってしまうと、実際に笛を贈られたのが何時なのか分からなくなってしまう。しかし、「吹き出でしに感じて」はその時の笛の音に＜感じ入って＞だろうから、衛門督は子供の時に笛を贈られた物と解して、この「より」をあえて＜ながら＞と言い換える。

*女の心は深くもたどり知らず(女心に深い事情も分からず)、しかものしたるななり(そのように其方に渡したのだろう)」 *「をんな」は未亡人の一条宮のことだろうに敬語が無い。是では＜一条宮は＞とは補語し難い。

などのたまひて(などと仰って)、

「*末の世の伝へ(夢枕の衛門督が「子孫に伝えたい」と言ったその子孫とは)、またいづ方にとかは思ひまがへむ(入道宮腹の若君の他の誰と思い間違うものか)。さやうに思ふなりけむかし(故君もそう思って大将に伝えたに違いない)」など思して(などとお思いになり)、 *「末の世の伝へ」は夢枕の衛門督が大将に伝えた「笛竹に吹き寄る風のことならば末の世長き根に伝へなむ」(和歌 37-08)を、殿も大将から聞かされてのことらしい。

「この君もいといたり深き人なれば(この大将君もとても思慮深い人なので)、思ひ寄ることあらむかし(若君の出自に思い寄ることもあるようだ)」と思す(とお思いになります)。

その御けしきを見るに(そういう殿の御様子を見ると)、いとど憚りて(大将はとても気後れして)、とみにもうち出で聞こえたまはねど(直ぐには切り出し申し為され難かったが)、せめて聞かせたてまつらむの心あれば(衛門督の遺志をせめて殿にお聞かせ申しあげたい気持から)、今しもことのついでに思ひ出でたるやうに(今になってことのついでに思い出したように)、おぼめかしうもてなして(記憶も曖昧な振りをして)、

「今はとせしほどにも(衛門督の臨終間際に)、とぶらひにまかりてはべりしに(見舞いに出向き申しました時に)、亡からむ後のことども言ひ置きはべりし中に(督が死んだ後の事を言い置き申した中に)、*しかしかなむ深くかしこまり申すよしを(殿に不審を持たれたままだが、決して反意無き事を謹んで申すということを)、返す返すものしはべりしかば(何度も申しておりました

が)、いかなることにかはべりけむ(どういう経緯があったのでしょうか)、今にそのゆゑをなむえ思ひたまへ寄りはべらねば(私には今だにその事情が分かりませんので)、おぼつかなくはべる(苦慮しております)」　*「しかしかなむ」は注に＜『集成』は「「しかしかなむ」は、夕霧の実際に発言した内容を省略した書き方」。『完訳』は「柏木が実際には詳しく述べたが、ここは「しかじか」と省筆」と注す。「かしこまり申す」は柏木が源氏に対してお詫び申す意。＞とある。衛門督の事情説明は非常に曖昧かつ漠然としていて「しかしかなむ」とあるが、衛門督の言葉を大将が正確に殿に伝えた、とはとても思えないし、今のような録音機器でも無ければ、仮に同じ言葉を伝えても、同じ事が伝わったか如何かは疑問だし、何よりも大将は督と姫宮との不義に大きな疑義を持っており、この大将の切り出しはそれを匂わせないように気を使う工夫も強いられる、という難しさだ。それでも疑問は疑問のまま殿に問えば良いので、大将が督の遺志として殿に伝えるべき話の要旨は複雑ではない。即ち、督は六条院源氏殿との間に問題を抱えて悩んでいた。殿の疑念を晴らせない力不足を督は詫びていたが、決して殿への悪意が無いことだけは分かって欲しい、という内容だ。督自身は大将に「いかなる讒言などのありけるにか」(柏木巻三章三段)という言い方をしていたが、事情に察しが付く大将は、むしろ「讒言(ぞうげん、ざんげん)」という語は避けたかも知れない。

と、いとたどたどしげに聞こえたまふに(と如何にも腑に落ちないように申しなさると)、

「*さればよ(やはり大将は何か気づいているな)」　*「さればよ」は、動詞「然り(さり、その通り)」の已然形「然れ」を接続助詞「ば」で条件項と明示したものに、強調語の「よ」で結んだ言い方。となると、已然形が何を意味するかだ。已然形は仮想上で＜そうなっている＞ものとして思考を進める文型。即ち、前の「この君もいといたり深き人なれば、思ひ寄ることあらむかし」という仮想が、また新たな傍証によって更に確実さが増して＜やはりそうか＞という思い。

と思せど(と殿はお思いになるが)、何かは(決して)、そのほどの事あらはしのたまふべきならねば(衛門督との確執の詳しい事情は口にすべきではないので)、しばしおぼめかしくて(直ぐには思い当たる節も無い様にして)、

「*しか(さて、そのように)、人の恨みとまるばかりのけしきは(督が懸念するような態度を)、何のついでにかは漏り出でけむと(何かの折に見せただろうかと)、みづからもえ思ひ出でずなむ(私の方も思い出せない)。　*「しか」は、「し」が前の話題を示す変数で、「か」はその対象を改めて客観視することを示す意識語。で、その「し」の内容だが、下に「人の恨みとまるばかりのけしき」とあるので、大将から持ち出された話題は衛門督が「今はとせしほど」に語った「六条の院にいささかなる事の違ひ目ありて、月ごろ、心の内にかしこまり申すことなむはべりしを、いと本意なう、世の中心細う思ひなりて、病づきぬとおぼえはべしに、召しありて、院の御賀の楽所の試みの日参りて、御けしきを賜はりしに、なほ許されぬ御心ばへあるさまに、御目尻を見たてまつりはべりて、いとど世にながらへむことも憚り多うおぼえなりはべりて、あぢきなう思ひたまへしに、心の騒ぎそめて、かく静まらずなりぬるになむ」(柏木巻三章三段)という事情説明を、相当正確に大将は殿に申し伝えたらしい。それに対して殿は「何のついでにかは漏り出でけむ」と惚けたのだから、大将の心証としては疑義はむしろ深まったのだろう。

さて(それと)、今静かに(後でゆっくり)、かの夢は思ひ合はせてなむ聞こゆべき(その夢見の件は考え合わせてから話すことにしよう)。*夜語らずとか(夢の話は夜にはしないものだと)、女房の伝へに言ふなり(女房が迷信で言うようだし)」　*「よるかたらず」は注に＜夢の話は夜には語らない

という言い伝え。「孫真人云フ、夜、夢ハ須ラク説クベカラズ」（紫明抄）。＞とある。「紫明抄」は＜鎌倉時代の源氏物語の注釈書。10 巻。素寂著。永仁元年（1293）以前の成立。将軍久明親王に献上されたもの。＞と大辞泉にある。「孫真人」は検索すると「漢方医列伝」といサイトに「孫思襞（そんしばく）」という 6 ～7 世紀の漢方医と紹介されていた。

とのたまひて（と仰って）、をさをさ御いらへもなければ（少しも身のある御返事もないので）、うち出で聞こえてけるを（大将は切り出し申した衛門督の遺志を）、いかに思すにかと（殿が如何お思いになったのかと）、*つつましく思しけり（より慎重にお考えになった）、*とぞ（ということのようです）。　*「つつまし」は＜気が引ける。遠慮がちにする。＞とあるが、「つつむ（慎む）」には＜慎重にする、注意深くする＞の語感があり、「つつまし」を「慎む」の未然形促進意に形態形容詞の「し」が付いた語とみれば、「つつまし」は＜より慎重に＞と解せる。　*「とぞ」は伝聞の言い切りで今でも良く使う言い方だ。が、注にも＜『弄花抄』は「紫式部が作と見せしと也」と指摘。『集成』は「事実を伝え聞いた語り手の口ぶり」。『完訳』は「語り手が伝聞した形で閉じる」と注す。＞などとあるように、是が無くても普通に終止文として結べそうで、幾らかの作為は感じる。尤も、事案の深刻さを思うと、重過ぎて何処かで一息吐きたい気分は分かるような気もする。

（2012 年 8 月 9 日、読了）